

7. 寝床の歴史: 民家にみる就寝空間と寝床

著者	町田 玲子, 木谷 康子
雑誌名	繊維製品消費科学 = Journal of the Japan Reseach Association for textile end-uses
巻	37
号	3
ページ	17-22
発行年	1996-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/9576

7. 寝床の歴史

—民家にみる就寝空間と寝床—

京都府立大学 町田玲子
滋賀女子短期大学 木谷康子

繊維製品消費科学 Vol.37 No.3 別刷

社団法人 日本繊維製品消費科学会

7. 寢床の歴史

—民家にみる就寝空間と寢床—

京都府立大学 町田 玲子
滋賀女子短期大学 木谷 康子

1. はじめに

「寢床」という言葉から私たちがイメージするのは、木綿の綿を詰めた掛け蒲団と敷き蒲団の組合せではないでしょうか。

木綿の伝来は、戦国時代末で、綿花の栽培は三河の国から始まり、現在私たちが使っているような「側も中身も木綿の蒲団が普及するのは江戸中期から」¹⁾といわれています。しかし、三河木綿の産地でも貧しい農家は大半、明治中期まで夜間蓑を着て寝ていた²⁾ということですし、また、瀬川清子によると、木綿の伝来以後「國の隅々まで、島根縣の北濱村の老人たちまでが綿の蒲團をつくるようになるまでには、少なくとも三世を費やし」³⁾たということで、木綿の蒲団が一般的になったのは日本の「寢床」の歴史のなかでは比較的新しいことなのです。

それでは、綿が普及する以前の日本人の寢床とは、どのようなものだったのでしょうか。ここでは、民俗学の領域の資料を中心に、おもに民家の就寝空間や寢床、寢方について述べたいと思います。

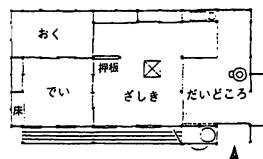
2. 寢室の呼称

現代の日本の住まいは、不動産の広告でよく目にするように、2LDK、3DKといった表現でしめされます。2LDKといえは、居間(リビング)兼食事室(ダイニング)兼台所(キッチン)とあと2部屋(個室=寢室)の住居であるということです。この表現は1950年代後半から一般的になったものです⁴⁾。それに対して従来の民家では、個室は存在せず、それぞれの居室には、団樂、接

客、就寝等の家族員に共通する特定の機能があり、呼称が付けられていました。そして、この用途や呼称は、資料1の例に示すように地方色が濃く、地域が異なれば同じ呼称の室でも平面構成上の位置や用途が異なったり、反対に同じ用途の室でも地域によって呼称が異なっていました。

『日本民家語彙集解』⁵⁾より、「寢室の呼称」とされている語彙を拾いあげてみますと、のべ270ほど集めることができます。平均すると1都道府県あたり6つ近い呼称が存在するということになりますが、青森県には24、福島県には23と多く、逆に静岡、三重、広島、熊本、沖縄の各県は1つというように、非常にばらつきがあります。

複数の就寝空間がある地域では、主人夫婦の寢室、若夫婦の寢室、老人の寢室といったように、その室の就寝者による呼称の区別もあったようです。たとえば、新潟県西頸城郡地方には、



旧 宮崎家(東京都)
ぞしき：日常生活の中心になる室
おく：寢室
でい：客間



菊家(奈良県)
だいどころ：日常生活の場
なんと：寢室
ぞしき：客間

資料1 民家の室の呼称と用途の相違の例
(表現研究所編『日本の民家』小学館より作成)

タカ、チウダ、ワリヤという3つの呼称が存在し、タカは若夫婦の寝室、ワリヤは主人夫婦の寝室とされていました。

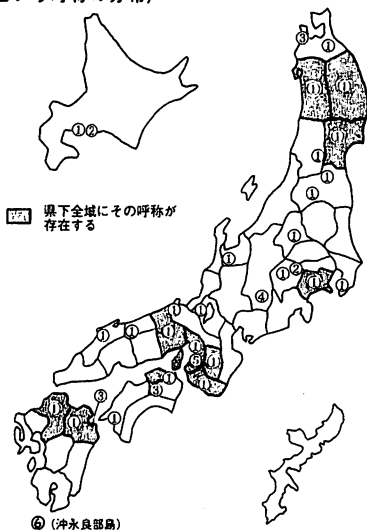
多くの地域で使われていた名称は、ヘヤ(21府県)、ナンド(25府県)、ネドコ、ネマなどです。

ナンドという室呼称は全国的に存在するのですが、寝室としての呼称の分布と平面構成上の位置を、資料2のように図示してみました⁶⁾。同じ呼称が北と南の離れた地域に存在すること、平面構成上の位置についても、近いから同じで遠く離れているから異なる、とはいえないことがわかります。

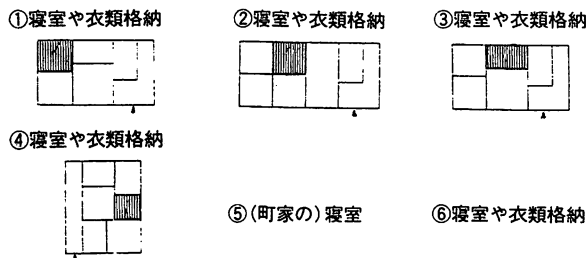
さまざまな呼称は、室の機能や構造から名付けられたと考えられるものおよび、寝殿造や書院造などの支配階級の邸宅の就寝空間に関する名称が伝わったと考えられるものがあります。

ネドコ、ネマ、ネベヤ、ネドコロなどは「寝るところ」という意味の呼称でしょう。また、カズキは夜着を「被く(かずく)」という語がもとであ

〈ナンドという呼称の分布〉



〈ナンドの機能と平面構成上の位置〉



資料2 ナンドの分布⁶⁾

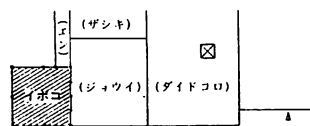
る⁷⁾とされています。青森県弘前市付近では若夫婦の寝室をイボ、イボコ、エボ、エボコと呼び、「疣(いは)こ」の意と解説されています⁸⁾が、資料3のように疣のように突き出した平面になっていて、ここからこの呼称が出来たことが伺えます。オクナンド(和歌山、広島、福岡)、オクノネマ(滋賀)は就寝空間が下手(しもて)にもうひとつ並んでいる場合の呼称です。ナンド、チウダイは後者の例としてあげることが出来ます。ナンドは、納戸のことで、古くは納殿(おさめどの)といい、貴族の邸宅にあって衣類・調度類を納め置く室のことでしたが、やがて寝室と同義に使われるようになったのが、民家にも伝わったということです⁹⁾。チウダイは、帳台のことで、寝殿造の宮殿内に敷設する調度の一つで、貴族の寝所としての名称が民家の就寝空間に使われるようになったものです¹⁰⁾。

民家の就寝空間は、主寝室として使われていた地域と、家族全員の就寝空間として使われていた地域があり、前者の場合他の家族員は、居間や接客空間に別れて就寝していたということです。また、閉鎖的で独立した専用の就寝空間をもたない民家が、温暖な四国山地や九州など西日本から南西諸島など南日本に分布しており、このような民家では就寝には枕屏風などを使って、居間や客室を用いていたそうです¹¹⁾。

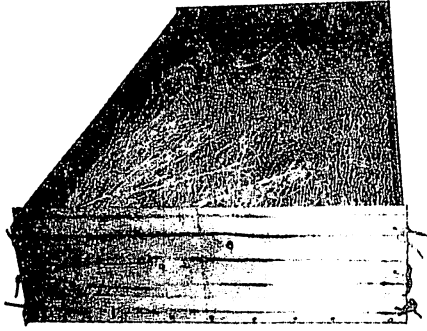
3. 藁の寝床

それでは、この就寝空間で、どのようにして寝ていたのかみていきましょう。快い睡眠ということを考える場合、夏の暑さより冬の寒さのほうが耐えがたいものがあると思います。綿の蒲団が一般的でなかった時代に冬の寒さをどのように凌いでいたのでしょうか。

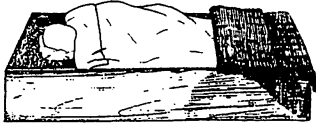
『北越雪譜』には、かますに入っているのまわりで家族全員が寝ている図(資料4参照)があり、「秋山の人はすべて冬も着るまゝにて臥す、



資料3 イボコ



資料7 箱床(積水ハウス総合住宅研究所蔵, 撮影 木谷)



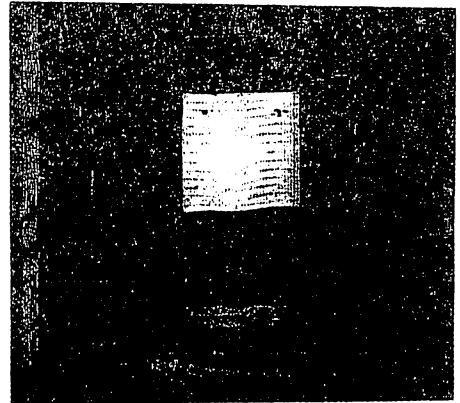
資料8 箱床に寝ている図
(宮崎 清『ものと人間の文化史 藁(わら)Ⅱ』法政
大学出版局P.211より)

用意でもあった。」¹⁹⁾と述べています。室内に敷きつめたのは、初穀だけでなく、そば穀、ひえ穀などの地方もあった²⁰⁾ようです。

寝床に藁を用いる方法として、また別の方法がありました。資料7, 8のような箱床と呼ばれるもので、福島県南会津地方や長野県北信地方で使われていたそうです。広さ畳1畳、深さ30cmの大きさの箱を板で作り、中に藁を敷きつめた寝床です。冬の寒さが厳しい地方では、このような寝床が準備され、冷たい隙間風を防ぎ、壁からの冷放射をさえぎり、狭い空間でも暖かく休める工夫がされていたのでした。

資料9, 10は信濃秋山郷の民家の「へや」入り口と入り口からのぞいた内部です。まわりを壁で囲まれ、入り口は小さく、薄暗い室内の様子が伺えます。開口部が非常に少なく閉鎖的な空間で、入り口の敷居を約50cmくらい高くして中の藁が飛び出すのを防いでいます。

高い框と板壁で間仕切りされ、入り口の高い敷居にたてられた板戸には、内側に「くるる(枢)」とよぶ「落し猿」がつけられ、戸を閉めると自動的に施錠され、外からは鍵がないと開けられないような構造²¹⁾をもつ寝室を、「帳台構え」とか「納戸構え」といいます。そして、入り口の高い敷居を「恥隠し」と呼ぶ地方があります。「或貧家の少年、寝藁々々とよく謂ふので、見得坊の父



資料9 旧山田家「へや」入り口
(宮沢智士編『日本の民家, 第2巻農家Ⅱ』学習研
究社 カラーグラビア73より)



資料10 旧山田家「へや」内部
(服部緑地 日本民家集落博物館, 撮影 木谷)

が之を戒め、人の聞く前では必ず蒲団と謂へて教へて置くと、チャンよ、こなたの脊中に蒲団が一筋くつついて居るは、と云つた²²⁾という話が伝えられており、藁の寝床は恥ずかしいものと考えられるようになっていきました。しかしながら木綿の薄団を使う家が増えるに従い、「板敷の上では寝にくいと謂って、藁の上に生涯を完了した老人」²³⁾がいたように好んで藁の寝床にねていた人も少なくありませんでした。

4. 万年床

住まいの構造は従来のままで、次第に綿の蒲団が各家庭に普及していくのですが、湿気を防ぐという特質²⁴⁾をもつ藁とは異なり、湿気を運びやすいという綿の性質が思わぬ問題を引き起

こすことになります。

藁の寝床であった時代には、夜には藁にもぐりこみ朝になったらそこから出ていくという生活の仕方、寝室の管理というのは新しい藁に入れ替えるときくらいでしたが、そのやり方が綿の蒲団を使うようになってからもそのまま引き継がれたのが万年床です。先に述べたように、民家の寝室は閉鎖的で、通風・採光が悪く、その中に綿の蒲団が敷きっぱなしにされている状態(資料12参照)は、非常に不衛生で、昭和10年代後半の同潤会による「東北地方漁村住宅改善要旨」²⁵⁾にみられるように、「東北地方の寝間は欠点中の欠点である。光線も通風もない閉ち込めた狭い室に寝ることは、衛生上非常によくないが、殊に万年床は最も非衛生的である。」と指摘されることになります。具体的な改善策として、「明るい大きい窓をつける、日中は風を通す、夜具は毎日片付ける、天井をつける」など7項目があげられていました。しかし、昭和27年の秋田

県の調査では51%の農家が万年床のナンドであったということです²⁶⁾。

5. おわりに

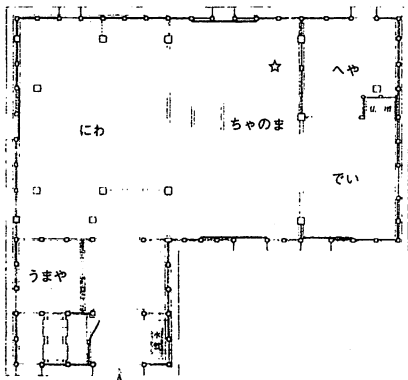
現在のようなさまざまな住宅設備がない時代においては、採暖のために狭い密閉された空間に集まって寝るという方法をとらざるをえなかったのでしょう。

以上、いくつかの例をみてきましたが、木綿の暖かい蒲団が普及する前にはそれぞれの地方で、寒さに対して少しでも暖かく快適に眠れるように、寝床や住空間に工夫がこらされていたといえます。

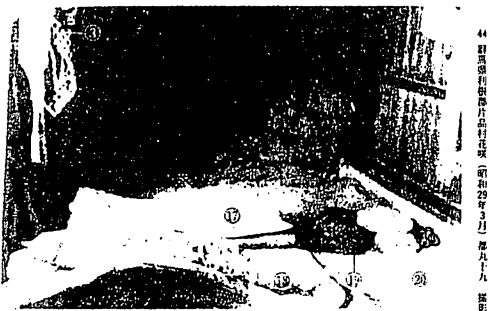
引用文献

- 1) 小泉和子；「家具と室内意匠の文化史」, 法政大学出版局, P.239 (1979)
- 2) 宮本常一；「民衆生活様式の変遷」【宮本常一著作集26】, p.318~319 (1981)
- 3) 瀬川清子；「寝具と寝室」【国文学 解釈と鑑賞】, 16-8, p.79 (1951年8月)
- 4) 西山卯三；「日本のすまい I」, 勁草書房, p.140 (1975)
- 5) 日本建築学会民家語彙収録部会編；「日本民家語彙集解」日外アソシエーツ (1985)
- 6) 前掲書 5) P.568~9 参照。
- 7) 柳田國男；「居住習俗語彙」, 国書刊行会, P.139~140 (1975)
- 8) 前掲書 5) P.56
- 9) 日本風俗史学会編；「日本風俗史事典」, 弘文堂, p.474 (1979)
- 10) 「日本国語大辞典」, 小学館, P.522 (1989)
- 11) 表現研究所編；「日本の民家」, 小学館, p.18 (1985)
- 12) 鈴木牧之選編, 岡田武松校訂；「北越雪譜」, 岩波書店, P.103 (1982)
- 13) 瀬川清子；「女のはたらき」, 未来社, P.223 (1962)
- 14) 早川孝太郎；「夜衾のこと」【旅と伝説】, 3-12, p.88 (1930)
- 15) 柳田國男；「新編柳田國男集 4」 筑摩書房, p.90 (1978)
- 16) 宮本常一, 前掲書 2), p.320
- 17) 瀬川清子；「藁のふとん」【民間傳承】, 第5巻第4号, p.37 (1940年1月)
- 18) 瀬川清子前掲書 3), p.78
- 19) 柳田國男前掲書 15), p.90
- 20) 饗庭斜丘；「蒲團講」【旅と伝説】, 13-12, p.11 (1940)

ここでは、そば殻の中で寝ている様子を「現在の百姓家では、良いなり悪いなり綿の入った蒲団をもたぬ家は、殆ど無いと云つても良い。ところが三四十以前までは、そんな蒲団を持たぬ家の方が大部分であった。明治中期までは、現在は高山市に編入されてある七日町の百姓家でさへ、……の例外をのぞいては、全部床無しの土座の家だったと云つてゐる。土座の家に住んで居るものは、蒲団を殆ど使はない。藁か、稗ガラか、又は蕎麥ガラのなかへモグリ込で寝るのである。或人が阿多野方面で夜遊びに忍込んだら、歩くたびにごそへと鳴って落こむだけでなく、肝腎の女の姿が見つからなかった。よく見たらスッポリ蕎麥ガラの



資料11 旧山田家 平面図(資料9と同じ, P.171)
資料10は平面図☆印より、へや内部を写した。



資料12 万年床
(['写真でみる日本生活図引④すまう』弘文堂P.47より)

中に落こんだ様になって、眠ってゐたと笑って話してゐた。また老人連中が素裸で寝るのは此の中だと云ふ事である云々(ひだびと七ノ一)」と述べている。

- 21) 高取正男；『高取正男著作集Ⅳ 生活学のすすめ』法蔵館，P.11 (1982)
- 22) 柳田國男；『定本柳田國男集2』筑摩書房，p.36～37 (1970)
- 23) 柳田國男；『定本柳田國男集14』筑摩書房，p.486～487 (1969)
- 24) 宮崎 清；『ものと人間の文化史 藁(わら)Ⅱ』，法政大学出版局，P.212 (1985)
- 25) 「東北地方漁村住宅改善要旨」『近代庶民生活誌⑥食・住』三一書房，P.444 (1987)
- 26) 西山卯三；『日本のすまいⅢ』勁草書房，P.51 (1980)



町 田 玲 子

1967年奈良女子大学大学院家政学研究科住環境学専攻修了。奈良女子大学家政学部住居学科非常勤講師を経て、1970年より京都府立大学家政学部勤務。現在同大学生生活科学部助教授。学術博士。専門は住居学，家庭管理学。

主な著書；「これからの家庭経営学」(共著，建帛社)，「いま家事労働に問われるもの」(共著，有斐閣)，「住生活と住教育」(共著，彰国社) ほか。

☆

☆



木 谷 康 子

1982年京都教育大学教育学部家政学科卒業。1984年奈良女子大学大学院家政学研究科住環境学専攻修了。滋賀女子短期大学，大阪蕨英女子短期大学等の非常勤講師を経て，1994年より滋賀女子短期大学生生活学科講師。専門は住居学，家庭科教育。

主な著書；「住生活と住教育」(共著，彰国社)